エッセイ

北門中学校と知里幸恵

SCE・Net　梅村文夫

E-44

発行日
2012.10.26

北門中学校は、北海道の旭川市にあるごく普通の中学校です。旭川駅からバスで 15 分程乗り、その後１０分程度歩くと、塀、柵はあまり無く、門構えもあまりしっかりしてませんが、学校らしき建物が見えてきます。コンクリートの壁に、右のような文字が刻まれていますので、ここが北門中学校であることが分かります。

私は、あるきっかけで、今年の９月に北門中学校を訪れました。私が所属する腐食防食学会の大会が、旭川市で開催されました。大会の会場となった大雪クリスタルホールには、旭川市博物館が併設されており、昼休みの時間を使って、博物館を見学しました。広いフロアーにはアイヌの歴史と文化に関する数多くの資料が展示されていました。そこで、知里幸恵さんの資料館と文学碑が旭川市の北門中学校にある事を知りました。私は以前に、知里幸恵の書いた「アイヌ神謡集」を読み、その時に強い印象を今も覚えていましたので、折角の機会と思い、資料館を訪れることにしました。

知里幸恵さんは、明治 36 年 6 月 8 日に登別で生まれましたが、5 歳頃から 18 歳までは旭川で過ごしました。19 歳を迎える年の 5 月に東京に上京し、その年の 9 月に持病の心臓病で亡くなりました。19 歳 3 ヶ月の短い生涯でした。その間、アイヌ人であることによる差別を受け続け、それに耐え、「銀のしずく降る降るまわりに、金のしずく降る降るまわりに・・・」ではじまる美しい「アイヌ神謡集」を書いた少女です。神謡集は、アイヌ民族の心や魂を、日本語ではじめて書いた本です。アイヌ民族の透き通った魂に触れることが出来ます。出版後、幾つかの外国語にも訳されています。

神謡集の序には、幸恵自身の言葉で次のような事が書かれています。
「その昔この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。・・（途中省略）・・太古ながらの自然の姿もいつの間にか影薄れて、野辺に山辺に嬉々として暮らしていた多くの民の行方も亦いずこ。僅かに残る私たちの同族は、進みゆく世のさまにただ驚きの眼

をみはるばかり。しかもその眼からは一挙一動宗教的観念に支配されていた昔の人の美しい魂の輝きは失われて、不安に充ち不平に燃え、鈍りくらんで行手も見わかず、よその御慈悲にすがらねばならぬ、あさましい姿、おお亡びゆくもの・・それは今の私たちの名、なんて悲しい名前を私たちは持っているのでしょう。・・(途中省略)・・私たちを知ってくださる多くの方に読んでいただく事が出来ますれば、私は、私たち同族先祖と共にほんとうに無限の喜び、無上の幸福と存じます。大正 11 年 3 月 1 日」

序文のごく一部ですが、アイヌを滅びいく運命と強く意識しています。また、民族の心や魂を後世に残すことを願って神謡集を書いた事も分かります。出版の校正を終了し、出版を見とどけた翌日（大正 11 年 9 月 18 日）に、幸恵は持病の心臓病で亡くなりました。アイヌの詩を後世に残すために、命を掛け、本の出版の最後の段取りを済ませ、力尽きたかのように亡くなった短い生涯です。幸恵は、民族のために、剣でなく、筆で戦った、はじめてのアイヌ人となるのです。

幸恵は若くして亡くなりましたが、その後、多くのアイヌ人が幸恵の神謡集に勇気づけられ、幸恵に続きました。例えば、伯母のマツは「アイヌ叙事詩ユーカラ集」20 巻を刊行しています。アイヌの心や魂や文化が今日消されずに残されているのは、幸恵が命を削りながら書き上げた神謡集のお陰と言っても過言ではないでしょう。

さて、北門中学訪問ですが、旭川駅前のバス停で、どのバスに乗れば良いのかを聞き、待つところしばらく、バスの運転手さんに、どこで降りたらよいかを聞き、バスを降りてからは、どのように道を行くのか人に聞きつつ、やっと着くことが出来ました。中学に着き、資料館を探したのですが、資料館らしき建物が見つかりません。私は資料館は、学校の近く、あるいは校庭内に建っている別建物と想定していました。入口には、受付の人がいて、資料館の中に入る。そのような事を想定していました。資料館らしき建物が見つからず、学校関係者に聞く事にしましたが、セキュリティーの関係でしょうか、学校のドアは何処も鍵がかかってます。玄関らしきドアの脇にインターホンがある事に気がつき、資料館について訪ねると、「少しお待ち下さい。教頭先生がお迎えに行きますので・・・」と返事が返ってきました。

資料館の前に掲げらた幸恵の写真

しばらくして、５０歳前後の教頭先生が私の前に現れたましたが、美人の女性の先生で、私は戸

惑うはめになりました。まさか美人の教頭先生に出迎えられ、案内されるなんて、想定もしていませんでしたので。

教頭先生に連れられ、廊下をしばらく歩くと、資料室と書かれた木製の看板と、見覚えのある知里幸恵さんの大きな写真が見えました。資料館は、学校の中の一室にあったのでした。資料館内には、知里幸恵さんの幼少の頃の写真や、家族と一緒に写したの写真や、アイヌ神謡集等に関する資料等が多数保管されていました。一つ一つの写真や資料を見ていると、知里幸恵さんの想いが伝わってくるようで、少しばかり、胸が詰まりだしました。

資料館を概略見終わり、写真を撮り終わった頃、教頭先生の案内で、校庭の中庭にある「文学碑」に案内されました。教頭先生の説明によると、知里幸恵は、現在北門中学校が建てられているこの地に住んでいたとの事です。美しいアイヌの心を謡った幸恵さんという希有の魂を忘れまいと思い、昭和 63 年から文学碑設立の活動がはじまり、平成 2 年に文学碑は完成し、除幕式にたどり着いたとの事です。写真に示すように、文学碑は、力強く、美しくて、祈りに満ちた作品となっています。

「文学碑」の脇には大きな枝を広げた楓の巨木が、文学碑を見守っているようにそびえています（後掲の資料を参照）。教頭先生の説明によると、この木は、幸恵の少女時代から立っていた木であるとの事です。在りし日の幸恵も、この木の周りで友と語らい、楽しい日々を過ごしたのでしょう。楓の木は、短かった幸恵の生涯を見つめ、そして今は北門中の生徒を見守っているのでしょう。

文学碑の最上段に刻まれている文字：
銀のしずく降る降るまわりに
金のしずく降る降るまわりに・・・

知里幸恵文学碑

北門中学校では、知里幸恵の誕生日となる６月８日を「銀の滴　降る日」と定め、毎年知里幸恵聖誕祭を行っています。

右の上下２つの資料は、第 22 回目となる今年の聖誕祭に、全生徒に配った資料（全４ページ）のうちの２ページです。１ページ目となる上の資料では、大きな楓の木（前述）と文学碑の写真の上の欄に、「彼女は一体どのような人だったのでしょうか・・・、どのような人生を歩んだのでしょうか・・・・北門中学校とはどんなかかわりがあるのでしょうか・・・」と生徒に問いかけています。

右下のページでは、昭和 63 年に書かれた文学碑設立趣意書が掲載されており、「文学碑設立に動いた方々の思いにふれよう」と、生徒たちに語りかけています。また、文学碑の除幕式（第１回　銀の滴降る日）の挨拶文も掲載されており、この日から毎年、文学碑を通して知里幸恵の心にふれる集いが重ねられていると説明されています。また、昨年の銀の滴降る日の様子（写真）が掲載されおり、生徒会役員が、中学校の校庭に咲いているエゾカンゾウの花を文学碑に献花しています。エゾカンゾウは幸恵が大好きだった花です。他の２ページには、幸恵の生涯の説明と、アイヌ神謡集の序文が全文が紹介されていますが、省略します。

銀の滴　降る降るまわりに・
金の滴　降る降るまわりに

～『知里幸恵』を学ぶ～

６月８日 —— 今年もまた，この日を迎えようとしています。
２２回目となる知里幸恵生誕祭「銀の滴 降る日」です。
北門中学校の校門を入るとすぐ左に見える「知里幸恵記念文学碑」
校舎１階に並ぶ「知里幸恵資料館」と「郷土資料室」

知里幸恵（ちり　ゆきえ）
彼女は一体どんな人なのでしょうか・・・
どのような人生を歩んだのでしょうか・・・
北門中学校とはどのような関わりがあるのでしょうか・・・

知里幸恵は，アイヌ民族に生まれました。
そして，その生涯のほとんどを，今，北門中が立つこの地で過ごしました。
でも，彼女が生きた人生は，わずか１９年間というとても短いものでした。

幼少の頃の幸恵

知里幸恵文学碑を優しく見守るように大きく枝を広げた楓の巨木。
在りし日の幸恵も，この木の周りで友と語らい，楽しい日々を過ごしていました。短かった幸恵の生涯の大部分を見つめてきた楓の木は，今，北門中のみなさんの毎日を静かに見守っています。

幸恵が好きだったエゾカンゾウの黄色い花。北門中の庭でもその姿を見ることが出来ます。

「銀の滴・降る日」(知里幸恵生誕祭)」が生まれるまで

文学碑設立に動いた方々の思いにふれよう

趣意書

『旭川区五線南五号』に一人のアイヌ少女が住んでいました。現在の北門中学校のあたりです。少女の名は知里幸恵。

明治四十二年頃から大正十一年五月までの約十四年間です。その年の五月に上京，九月には心臓病で死亡，十九才三ヶ月の短い生涯でした。

是年，校正に心血を注いだ，彼女の生の証明ともいえる『アイヌ神謡集』が出版されました。

銀の滴（しずく）　降る降るまわりに
金の滴（しずく）　降る降るまわりに…

という，有名なフレーズが冒頭の詩に出てきます。この美しいことばで綴られた『アイヌ神謡集』とともに，美しいことばを選び，アイヌ民族のこころを謳った知里幸恵さんという者有の魂を忘れまいと思うのです。

旧『旭川区五線南五号』――つまり現在の近文地区に文学碑を建てよう，そんな思いに心を同じくするものが集まって，「知里幸恵文学碑を建てる会」を設立致しました。

どうか文学碑を建てることにご理解をいただき物心両面でのご支援ご協力を願ってやみません。

昭和六十五年六月八日(知里幸恵さんの誕生日)に，ぜひとも除幕式を迎えられるように祈りながら，そして，その碑(いしぶみ)のまわりに，銀のしずくが降ることを切望しつつ・・・・

昭和六十三年五月吉日

代表委員　佐藤喜一　高野斗志美　小笠原克　笠野茂　藤本英夫

ポツリと雨が降りました。
１９９０(平成２)年６月８日，知里幸恵文学碑除幕式のあの日，雨が降りました・・・・・
「銀の滴降る降るまわりに，金の滴降る降るまわりに」という歌を歌いながら，ゆっくりと私は大空に輪をえがいていました。
小さい矢が無数にキラキラしながら，まるで銀の滴や金の滴のように降っていきます・・・・・あの日，ポツリと雨が降りました。

文学碑の除幕式（第1回 銀の滴降る日）を迎えた日，この日から毎年，文学碑を通して知里幸恵の心にふれる集いが重ねられてきています。

文学碑の彫立作業に臨む彫刻家，空充秋さん。「句御影石」と「さび御影石」で創られた碑は，「小さな滴一つでも素晴らしい力を夢を持っている」というアイヌの教えを表現しています。
（１９９０年６月）

本当に知里幸恵文学碑ができるのだろうか，募金が本当に集まるだろうか，碑のデザインはどんな風にしたらいいのだろうか・・・そんな心配づくめのスタートが，約３年前のことでした。何から何まですべてが初めての運動でしたから，まず，イロハからの勉強だったのです。そして，結局，大勢の人の協力で本日の除幕式を迎えたのです。感無量です。

いま，こうして知里幸恵文学碑の前に立って強く強く心に思うことは，知里幸恵さんのたった一冊の本『アイヌ神謡集』のもっている不思議としかいいようのない（力）です。その（力）が，ぐいぐいと非力なわれわれをひっぱってきたのだと思うのです。そして，知里幸恵さんの『アイヌ神謡集』を読んで感動された彫刻家空充秋さんの手によって文学碑が完成されました。ご覧のように，力強くて，美しくて，祈りに満ちた作品です。空充秋さんに心から感謝申しあげたいと存じます。その他，非常に多くの方の協力を得ましたこと，深く，厚く御礼申しあげます。

この文学碑の建っているすぐ近くで，知里幸恵さんは明治から大正にかけて約１４年間住んでいました。ようやく幸恵さんが帰ってきました。７０年後の近文が，幸恵さんの眼にどう映っているのでしょうか。自然を切り売りして，アブクのような繁栄のなかにいるわれわれにとって，知里幸恵文学碑を通してその心を自分のものとする作業が，これからはじまるのです。

６月８日，知里幸恵さんが生まれた日に除幕式を迎える意義をかみしめたいと，強く思います。

本日はまことにありがとうございました。

（１９９０年６月８日　知里幸恵文学碑除幕式にて
銀の滴降る日実行委員会代表　間見谷　喜昭氏挨拶より）

神格であるカムイを神の元にかえす儀式「カムイノミ」

昨年（２０１１年）の生誕祭から

他の参加者とともにエゾカンゾウを献花する生徒会役員

この資料から読み取れることは、北門中学では、知里幸恵を通して、子供たちに、命の大切さや、人の尊厳に気づかせる教育が日常的にも、また全校一斉行事としても行われているとことです（前述の資料を、200%程度に拡大すると、内容を読み取る事が出来ます）。

今日、日本全国の中学では、いじめの問題が大きな社会問題になっています。滋賀県大津市の中学では、いじめに起因して自殺した生徒も生じています。新聞報道によるといじめの内容は極めて残酷です。また、陰湿ないじめは全国的な問題となっています。大津の中学では、昨年いじめで生徒が自殺し、丸一年となる今年の 10 月 11 日に、命の教育として、いじめに関する感想文を書かせ、命の大切さを話し合ったという事です。自殺者が出てしまってから、急遽そのような命の教育を開始しても遅すぎます。元来、命の教育は、いじめを防止するためのものです。常に継続的に日常的に行う必要があります。大津の中学のいじめの事例を教訓に、幾つかの学校では命の教育に力を入れだしたとも聞かれていますが、命の大切さは、説教じみた訓話では、子供たちに伝わらないのかと思います。本当の命の教育は、日常の生活のなかで、命の大切さに触れることと思います。

北門中学は、知里幸恵資料館と郷土資料室が常設されており、何時でも見ることが出来ます。また年に一回、知里幸恵生誕際「銀の滴　降る日」という特別の日を儲け、全校一斉の行事として、知里幸恵の心に触れ、知里幸恵を考える日としています。

北門中学校の幸恵を通しての命の学習は、いじめが残酷化、陰湿化し、大きな社会問題になっている今日、参考にすべき一つの取り組みとなるでしょう。学校の伝統行事や文学碑、資料館等を通じて、知里幸恵の心と接する中で、子供たちは自然と命の大切さに気づくことが出来るでしょう。もしかしたら、幸恵はこの地に戻り、生徒たちと心を交わしているのかもしれません。教頭先生はじめ北門中学の多くの学校の関係者のひたむきな努力が、幸恵をこの地に呼び戻しているのかも知れません。

右の写真は、文学碑の前に立つ筆者です。最後、帰り際に、教頭先生が撮った写真です。暖かい思いが沢山伝わり、暖かい思いが沢山心に残った北門中学校でした。この暖かさこそが、子供たちにとっても一番大切な事なのでしょう。

知里幸恵文学碑の前に立つ筆者